

---

# 召喚生徒リディア

二葉亭燿夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召喚生徒リーディア

### 【Zコード】

Z80330

### 【作者名】

一葉亭燿夜

### 【あらすじ】

大いなる者を名乗る存在にFF4のリーディアとして転生させられた主人公が、ネギま！の世界で頑張ります。  
「悲しい程の不定期です」

## キャラ紹介（2011／08／11更新）（前書き）

基本的に作者が忘れない様に書いてる気がします、読まなくとも問題はありません。

ざつと、主要キャラ紹介です。

進行に応じて追加していく予定です。

## キャラ紹介（2011／08／11更新）

名前：リティア・ミスト

来歴：いわゆる転生者。大いなるバカにFF4のリティアにされ、ネギま世界へ転生された。

容姿：FF4後半の成長した姿で存在が固定されているため、永遠の18歳（本人談）。

能力：

「黒魔法」

原作通り、すべての黒魔法を操る。

「白魔法」

原作ローザと同様、すべての白魔法を操る。

「召喚魔法」

ネギま世界の召喚と違い、特定の強力な幻獣を呼び出す魔法。

「竜騎士」

槍術とジャンプを行う強靭な肉体を持つている。ついでにライダーさんバリの騎乗スキルを持つ。

「擬人化召喚」

幻獣を擬人化して呼び出す魔法。

「百合」

元は男性だったらしく、恋愛対象は女性になつていてる。

名前：イフリータ

イフリートの女性形から。

来歴：炎の召喚獣イフリートが擬人化召喚された姿。

容姿：燃える様な赤い髪を持つワイルド系お姉さん。褐色の肌とダイナマイトバディの持ち主。

能力：

「地獄の火炎」擬人化を解き十全の力で炎を放つ。

「火属性魔法」あらゆる火の属性を有する魔法に適正と耐性を持つ。  
「料理上手」暖かい食べ物には鉄人級の腕前。

名前：シヴァ

来歴：氷の召喚獣シヴァが擬人化召喚された姿。

容姿：凍る様な青い髪を持つクール系お姉さん。透き通る美肌と怜  
俐な美貌の持ち主。

能力：

「ダイアモンドダスト」擬人化を解き、十全の力で吹雪を放つ。

「氷属性魔法」あらゆる氷の属性を有する魔法に適正と耐性を持つ。

「デザートの鉄人」冷たい食べ物には五つ星パーティシエ級の腕前。

「チョコボライダー」チョコボ乗り憧れの存在。

名前：プレシア

来歴：雷の幻獣ラムウが擬人化召喚された姿。

容姿：怪しげな紫の長い髪を持つセクシー系お姉様。大人の魅力と  
際どい服飾センスの持ち主。

能力：

「裁きの雷」擬人化と解き、十全の力で雷を放つ。

「雷属性魔法」あらゆる雷の属性を有する魔法に適正と耐性を持つ。

「セクシーデザイナー」彼女の作る服は素晴らしいの一言、ただし  
露出が高め。

「薫養担当」彼女の知識は多岐に亘り、且つマニアック。

名前：アマンダ

来歴：幻獣ヴァルガリマンダが擬人化召喚された姿。

容姿：鮮やかな青い髪を持つ妖艶お姉様。女として自分を美しく魅  
せる事に腐心しており、戦闘力が非常に高い。

能力：

「トライディザスター」擬人化と解き、炎・氷・雷を同時に放つ。

「自然操作」あらゆる自然現象を操る事が出来る。

「セクシーモデル」プレシア制作の際どい衣装を完璧に着こなす強者。

「仮面のカリスマ」どんな時も怪鳥の仮面を外さない。仮面愛好家にとってカリスマ的存在。残念な美人。

備考：

かなり古いゲームですが、仮面は「ネクストキング（PS1）」のキヤラウェイ」がイメージドンピシャです。Google画像検索でも真面な映像が引っ掛からないので、文章で表現するしかないw

## キャラ紹介（2011／08／11更新）（後書き）

原作開始までは幻獣たちの追加がメインかな？

## プロローグ（前書き）

唐突ですが、リティアさんの冒険が始まります。  
よろしければ、お付き合い下さい。

## プロローグ

人里離れた深い森の中、私は途方に暮れていた。

突然「大いなる者」を名乗るバカに転生とやらをされたのです。

「アタシイ、最近FF4プレイしたんだけど、リディアちゃんが超  
く可愛いんですけど　で、リディアちゃんの活躍する場を自分で  
用意しちゃおうって？思つたワケ。超頭良くな〜？でさ、パ  
ンピーのままじゃなんだから色々能力も付けよう？みたいな？ちな  
みにネギま〜って漫画みたいな世界に送つから、エヴァちゃんと  
助けちやつてよ？」

頭の痛くなる様なキンキン声でした。

FFは分かるけど、ネギま知らないよつ！とか。

色々能力の詳細聞いてないよつ！とか。

エヴァって誰つ！？とか。

色々言いたい事はあるけど、一番重要なのは・・・

「何で男の私をリディア（女の子）にしたのか分からんのですけ  
どおおおおお！？」

そう、私は男だった『はず』なのです。

転生前の記憶はありませんが、年頃の少女の身体に違和感を感じて  
います。

「中途半端な仕事して、あの『**大きいなる者**』！」

ひとしきり叫んだ時、自分の直ぐ側に大きな箱が置かれている事に気付きました。

こんな森の中に都合良く置かれているのは**大きいなる者**関係でしょうか？

恐る恐る近づいてみると、箱の上に紙が置かれていました。

「うーん、何々・・・」

内容を要約すると、これを書いたのは**大きいなる者**の部下の天使様で、謝罪から始まり謝罪に終わる中間管理職の哀愁たっぷりの手紙でした。

そして本文は私の能力と、お詫びの品についてでした。

どうやら私はFFの黒魔法・召喚魔法に加え、白魔法も使える様になっているようです。

そして、『色々能力』ですが、私は竜騎士になつた模様です。カインさん並の槍術と、ジャンプを可能にする身体能力を得たとの事。しかも身体自体はリティアのままで。

なんでもネギま！はバトル漫画らしく、接近戦も出来ないと危ないとの配慮だとか。

最後に幻獣を擬人化して召喚する擬人化召喚とあるのですが、これは何の意味があるのでしょうか？

「・・・まあ、後で試してみましょう」

とりあえず、深く考えるのは止めておきましょう。

後、箱の中身はお詫びの品である装備と着替えでした。

うら若い少女を着の身着のままで、深い森の中に放り出すとか大いなる者は恐ろしい事をします。

「この竜騎士の鎧がFF5の女竜騎士仕様ではなく、カインさん仕様のフルプレートなのにジャストサイズというのは微妙に気持ち悪い気がしますね・・・」

ちなみに、鎧の上から縁の外套を身に着けています。  
先ほど脱いだローブや、着替えもそうですが、やたらと緑色が目に付きます。

恐らくはイメージカラーとかなのでしょう。

「後は槍を持つて・・・完成ですね」

これでクマやオオカミが襲つてきても大丈夫です。  
リディアの魔法に力イン武力なので、頭では大丈夫だと分かっていますが、怖いものは怖いですからね。

「さて、まずは森を抜けましょうか」

数分後、ジャンプで森の木々より高く飛べる事に気付き、興奮して跳ね回っていると、森の向こうに西洋風の町並みが見えたので、その町を正面の目的地にしました。

## プロローグ（後書き）

まずは導入です。

## 第0-1話「森の魔女リティア」（前書き）

主人公がローカルで有名になっています。  
それと従者というか家族が登場です。

## 第0-1話「森の魔女リティア」

皆さん、お久しぶりです。森の守り人リティアです。

私がこのネギマ（？）の世界に降り立つてから、既に70年ほど経ちました。

教会の締め付けを嫌つて最初の町を5日で飛出し、最初に居た森の奥深くにほとんど引き籠つて静かに自給自足の生活を送つています。そして、時々森の奥まで迷い込んでくる人を助けていた所、いつの間にか近隣の町や村で私の事を「森の魔女」、この森の事を「善き魔女の森」と呼ばれる様になつていきました。

それと5年程経つてから気が付いたのですが、どうやら私は不老らしく、何年経つても年を取りません。

外の世界（森の外ですが）は中世ヨーロッパらしいので、平均寿命が40を切る世間では世代交代が進み、森の奥で何時までも同じ姿で現れる私は御伽噺として語られる様になつた訳です。

「リティアさま、『はん出来たよ、早く席着きな』

「はい、今行きます」

そんな私ですが、家族が出来ました。

「今日の『はんは何ですか？』

「今日は山菜ときのこのシチューだよ、熱い内に食べな

この気風の良いお姉さんは、擬人化召喚によつて人の姿になつた炎の幻獣・イフリータさん。

燃える様な赤い髪に褐色の肌を持つ、ダイナマイトバディのお姉さんです。

ちなみにイフリータといつ呼び名はイフリートの女性名詞です。

「ちょっと、シヴァ。あんまりリティアさまに近付くんじゃないよ、折角のシチューが冷めちまつ」

「私は貴女と同じ距離を保つているだけよ。貴女の近くだとシチューが熱くなり過ぎて、猫舌のリティア様には食べれなくなるでしょう？」

此方のクールなお姉さんは、同じく擬人化召喚によつて人の姿になつた氷の幻獣・シヴァさん。

凍る様な青い髪に透き通るような美白肌を誇る、スーパー モデルの様なお姉さんです。

実は怜俐な鋭い面差しと、イフリータさんより少し高い身長がコンプレックスらしいです。

「丁度良い温度ですし、とてもおいしいですよ」

「当たり前だろ、リティアさまのために心を込めて作ったからな」

「ふふつ、よかつたわね」

60年前に一人を擬人化召喚してからは、こんな光景が我が家の日常になつています。

何故最初の10年は呼ばなかつたかといつと、この世界に来た直後はレベル不足だつたらしく、そもそも召喚が成功しなかつたのです。

一人で森の奥は寂しかつたので、頑張つて修行しました。

チョコボすら呼べないレベルで転生させるなんて、大いなる者は気が利きません。

しかも召喚出来てから判明したのですが、擬人化召喚を行うには、私が擬人化した姿を明確にイメージ出来なければ通常の召喚しか行えないのです。

チョコボさんは残念ながら上手くイメージが固まらず、現在に至る

まで擬人化召喚に成功していません。

姿が比較的人型に近く、会話による「//ユーニケーションでイメージを掴めた二人でようやく成功した次第です。

「リディア様、デザートはシャーベットでよろしいですか？」

「はい、ありがとうございます」

「この後は鍛錬の続きですか？」

私の前にシャーベットを用意しながら、シヴァさんが食後の予定を尋ねてきます。

爽やかなフルーツの香りと氷の冷たさを堪能しながら、最近鍛錬ばかりで森の見回りをしていない事に気付いたので、偶には森を見回ろうと思います。

「今日は森の見回りに行つてきます、どちらか付いて来てもうえますか？」

「アタシが！」

「私が！」

「・・・・・」

二人が同時に立候補し、相手を牽制するように睨み合いを始めてしました。

双方とも美人さんなので、睨みつける表情に迫力があり過ぎます。しかも、周囲の温度が上がつたり下がつたりと、別の意味でも迫力満点です。

正直怖い位に一人が慕つてくれているのは嬉しいですが、最近は身の危険を感じることが増えてきた気がします。

「リディア様は私が責任を持つてお守りしますから、貴女は大人しく留守番でもしてなさい」

「見回り中にリディアさまを押し倒せうとした前科のあるアンタが

『責任』だつて？」

「さうよ、責任を持つてリディア様と幸せな家庭を築くから安心な  
わい」

「全然安心できないよつ！？大体アタシが、リ、リディアさまに責  
任取つて幸せな家庭を築いてもらうんだから！」

・・・いや、本当に身の危険を感じずにはいられません。

で、結局三人揃つて見回りに行く事になりました。

ちなみに私達の恰好は色違いの召喚魔導師服（リディア仕様）です。  
イフリータさんとシヴァさんの合作で、やたら丈夫で常に清潔に保  
たれる様に精靈の加護が付いた逸品ですが、肩と脚が微妙に露出度  
が高いのが気になります。

以前、一般的な召喚士服を知らないからかと確認してみたところ、  
「ああ、あんなのはリディアさまには似合わないよ」「これはリデ  
ィア様仕様の専用導師服です。もちろん私達はリディア様と同じ物  
を着ますけど」と良い笑顔で素敵な返答を頂きました。

まあ、一人が態々用意してくれた服を着ないと「選択肢はあるは  
ずも無いのですが。

「リディア様、チョコボの扱いがまた上達されましたね

「え、そうですか。ありがとうございます」

森の中を三人チョコボに乗りながら移動していると、不意にシヴァ  
さんが褒めてくれました。

私たちの中で一番のチョコボライダーである彼女に褒められて、ついつい頬が緩んでしまいます。

何故かシヴァさんとイフリータさんが鼻を押さえ、空を見上げて首の後ろを叩いていますが見なかつた事にします。

そんなキャツキヤツウフフツな感じで見回りを続けていると、何か私の感覚に引っ掛かるモノがありました。

「？・・・これは血の匂い？イフリータさん・シヴァさんへ行きますよ！」

「了解したよっ！」

「承知致しました！」

二人に声を掛けてチョコボを加速させます。

チョコボは飛べない代わりに馬並の巨体と、馬を超える脚力を持つ黄色い巨鳥。

人ひとりを乗せているとは思えない速度で森を駆け抜けます。血の匂いが近づくにつれ、言い争う様な声が聞こえてきました。

「待ってください騎士様！この娘が吸血鬼かもしれないから殺すなんて物騒な事は止めてください！」

「こんな怪物を生かしておけるワケがないだろ？！放つておけば領内に災いを呼ぶに決まっている！！直ちに殺すのだ！」

「ここは善き魔女の森です！ここを目指してたつて事は、この娘は救いを求める子供に違ひねえ！後は森の魔女様が決める事でさあ！」

「そうです！この辺りで吸血鬼が悪さをしたなんて聞きません、何もしてない子供を裁くなど止めて下さい！」

何やら村人風の人達の後ろに庇われた少女を巡つて言い争つているみたいですね。

この人達は森の北端に住み着いている人たちですね。何人か見覚え

があります。

この辺りでは助かる見込みの無い病気や怪我をした者が、最後の望みをかけて御伽噺の魔女を探して森を目指します。

そして、この森には私という本物の魔女が居るため、運良く私たちに発見された者は治療を受けて助かります。

そうした者たちが私を慕い敬い、その膝元である森に住み着き始めたという経緯から、この人たちは助けを求める者を見捨てられない優しい人たちですからね。

あ、血の匂いの元はこの少女ですね、長い金髪の間から見える背中の大きな傷は早急な治療が必要でしょう。

恐らく血の付いた剣を持つ鎧姿の騎士が下手人でしょう。

「静まりなさい、ここは森の魔女リディア様が住まう場所、争いは許されません」

シヴァさんが冷たい声音に反応して、その場にいた人達が一斉にこちらを向きます。

というかシヴァさんがノリノリです、森の魔女って本人非公認の呼び名なんんですけど。

「貴様が魔女とやらか!? 吸血鬼を追つていて更なる獲物が転がり込んでくるとは、私は幸運の女神に祝福されているようだなっ!」

うわあ、関わり合いになりたくないタイプの人ですね。

私たちの事を舐め回すように見ながら、鼻息荒く『獲物』って言いましたよ。

恐らく追いかけられていた少女も目を付けられてしまつたのでしょうか、可哀そうに・・・。

「さあ、大人しくするが良い。手荒な事をして傷物にしてはもつた

「いいからな」

「くさい口を閉じなつ！森を汚い足で踏み荒らすが下郎がつ！」

「リティア様、どう致しますか？」

イフリータさんが大分ヒートアップしてますね。まあ欲情しますつて顔に書いてあるような男に、あんな風に言われたら女性として不愉快ですからね。

シヴァさんの方も私に意見を伺いながらも「始末しても？」と顔に出でていますし。

「とりあえず、無力化させて下さい。私はあの娘の怪我を診ますので」

「まかせな！」

力強く応えたイフリータさんと無言で頷くシヴァさんにその場を任せ、私は村人さん達に囲まれた少女の元へ。

「その娘をこちらに」

「へ、へい」

周りより一回り体格の良い男性が、少女に余計な痛みを与えないよう慎重に此方に差し出します。

ふむ、派手に出血していますね、まずは傷を塞がなくてはいけませんね。

「あの、魔女様。この子は助かりますだか？」

「はい、この程度なら私の力で治せるでしょう。・・・・ケアルラ」

精神を集中させて高まつた癒しの波動を一気に少女へ流し込むと、

みるみる傷が塞がっていきます。

ケアルガさえ使えば一気に全快に出来るのですが、白魔法は習得速度が遅いみたいで未だに中級レベルの魔法が精一杯なのです。

「ふう、これでなんとか傷は塞げました。失った血が多いので安心は出来ませんが私の家で様子を見ます」

周りで心配そうに治療を見守っていた人達が安堵の息を漏らしています。本当に良い人達です。

「リティアさま、さつきの男は無力化させたよ」

イフシータさんが自分の後ろを親指で示す方向を見れば、先程の騎士らしき男が首だけ残して地面に埋まっています。

その横では氷で作られたスコップを肩に担いだシヴァさんが、一仕事終えた良い笑顔をしていました。

「お疲れ様です、記憶操作もしてくれたみたいですね。では強制転移呪文で遠くに飛ばしてしまいましょう。・・・・・デジヨン！」

その後、少女を私達に託した村人達は此方に頭を下げながら村へ帰つていき、私達も少女をチョコボに乗せて我が家へと帰つて行きました。

「リティア様に助けて頂けるなんて、運の良い娘ですね」

「ホント、ホント。吸血鬼つて何かと目の敵にされてるからねえ」

「潜在能力は高そうですし、夜になれば目を覚ますでしょう」

「確か今夜は満月だし、ホント運が良いなコイツ

・・・あれ？

何だか二人が哀れな冤罪少女が、本当の吸血鬼かの様な会話をしていますね。

・・・・・あれ？

## 第01話「森の魔女リティア」（後書き）

助けられた少女はもちろん彼女です。

そして、次話がなかなか納得のいく出来にならず、苦戦する事しきりです。

もし万が一にも気に入つて頂けるような、フィーリングカッフルな感性の方がいらっしゃいましたら、「コイツまだ次話で悩んでるのかよ（ニヤニヤ）」と生暖かく見守つてあげて下さい。

ちなみにツツミミフリーなので、変なところを見つけたら、むしろツツミンで下せ。大変ためになります。

次回、お会い出来たらお会いしましょ。

## 第02話「御伽噺の魔女リトニア」（前書き）

やつと、続きを書けたけど・・・、後半は自分で感じるのは微妙な  
感じにw

## 第02話「御伽噺の魔女リティア」

皆さん、こんにちわ。御伽噺の魔女リティアです。

現在、私は泣きじゃくる金髪の少女をあやしています。

今日の昼に助けた少女は、どうやら本当に吸血鬼だったようです。吸血鬼として生きてきた50年で初めて、自分を吸血鬼と知りながら助けてくれた事を理解すると、突然号泣されてしまいました。

・・・今更「私は知りませんでした」とは言えない雰囲気です。というか、イフリータさんとシヴァさんが「私は当然知っている」のを前提に少女に経緯を話したからなのですが。

「すまない、みつともない姿を見せた・・・」

顔を真っ赤に染めて視線をそらす彼女が、大変可愛いのはここだけの話です。

「しかし、吸血鬼と知りながら何故助けてくれたのだ?」

「私には助ける力があつて、助ける気がありました。それだけの事ですよ」

「そうか。御伽噺に聞いていた善き魔女の森に、魔女は本当に居たのだな・・・」

何やら彼女が凄くキラキラした瞳を向けてきます。

私って一体どれだけ有名人なんでしょうか?

基本的に森の外には出ない生活をしてますから、外での自分の評価は助けた人達から聞いたモノが全てですし。

「魔女よー!どうか私の話を聞いて欲しい!」

私が自分の知名度について考えていると、彼女が決意の籠つた瞳を向けて話出しました。

彼女の名はエヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。元は隣の領地の貴族の娘であり、10歳の誕生日に日が覚めると吸血鬼になっていた事。

両親や家臣たちを殺され、人間で無くなつた彼女は全ての元凶の男を殺した事。

その後、各地を転々としながら教会や正義の魔法使いとやらから逃げている事。

そして、不死ゆえの終わり無き日々に疲れ、御伽噺の魔女に縋つてやつて來た事。

「誰も彼もが私を滅ぼすべき悪だと言つ。誰も彼もが私に刃物や杖を向ける。だが私の命に終わりは訪れない。私を殺す事は出来ても滅ぼす事は誰にも出来なかつた。だから頼む、魔女よ！私の悪夢を終わらせてくれっ！」

・・・・・重つ！？

普通そこは「私を助けて」じゃないんですかっ！？  
もしかして自分を滅ぼしてもうう為に私を探してたとかじゃ無いですかねっ！？

めでたしめでたしの御伽噺に願う事じゃないですよねっ！？  
これはいけません。私の『善き魔女（他称）』という名に懸けて、この幸薄い少女を助けてあげなくてはなりません！

「エヴァンジエリンさん・・・私にも真祖の吸血鬼を人間に戻す事は出来ません。ですが、ここに貴女の敵は居ません。それに私たちも悠久の時を生きる者。いつまでも貴女と共に居れます。だから、貴女さえ望むなら私たちと共に暮らしませんか？」

「えっ、共・・・に？」

「そうです。この穏やかな森で静かに・・・、外に比べたら退屈かもしれないんですけどね？」

「し、しかし私は吸血鬼でっ！」

「私は魔女ですか？」

「わたしは炎の幻獣だけど？」

「私は氷の幻獣です」

「・・・・・・・・」

目を見開き口をパクパクしているエヴァンジエリンさん。  
ちょっと強引でしたが、先程の悲壮感を払拭する事には成功したようですね。

「一人で生きて行くには永遠は長過ぎます。でも四人も居れば少なくとも寂しくは無いはずです。あ、ちなみにこれは経験談ですよ？  
貴方より20年長く生きている先輩からのアドバイスです」

そう言つてウインクした私に、彼女は抱きついて再び泣き出していました。

イフリータさんとシヴィアさんも、私ごと彼女を抱きしめて優しく微笑んでくれています。

別にエヴァンジエリンさんを救えたわけではありません。  
自身は吸血鬼のままですし、命を狙われるのも変わりません。  
ただ、私たちと共に居る事で、少しでも安らげてくれたらと、そう思いました。

・・・というやり取りがあつてから、早いもので50年経ちました。

私の年齢も遂に三桁に突入し、現在120歳です。

新たにエヴァが加わった生活も順調そのものです。

あ、呼び方に関してはエヴァ本人の希望で「エヴァ」「キティ」の何れかで呼ぶ事になりました。

私の事も「リディア」と呼ぶように言つたのですが、頑なに受け入れてくれず「姉様」と呼ばれています。

何でも私の方が外見も実年齢も上なのが理由だそうです。

まあ、本人が嬉しそうなので無理に直させる必要も無いのかもそれませんが。

ちなみにイフリータさんとシヴァさんが、面白がつてエヴァの事を「お嬢」「お嬢様」等と呼んでいます。

何というか、シヴァさんは従者然とした様子が非常にツボにハマっている気がします。

「姉様！私たちが出会つて50年の記念パーティーを開くぞ！」「ケケケッ、酒ノ用意ハ、バツチリダゼ、姉御」

気が付けばエヴァの人生の半分は一緒に生活しているのですね。感慨深いです。

それと、エヴァの頭の上で酒瓶を振り回している片言の人形は「チヤチャゼロ」といいます。

15年前にエヴァが作り上げた魔道人形の従者です。何でも私の召喚する幻獣たちを見ていて、自分もそういう者が欲しくなったそうです。

最初は私の使う召喚魔法を覚えようとしたみたいですが、魔法体系

が異なるため難航しています。

まあ、召喚魔法の習得には未だ至っていませんが、50年近くの修練でブリザド等の氷属性の初級魔法は使える様になつたので、何時かは召喚魔法も出来るかもしれません。

「リディアさま、お嬢、今日はどうにするから期待してな  
みー」

「はい、パーティーは決定事項ですね。わかります。

まあ、エヴァからの提案は予定外ですが、もともと50周年のプレゼントは用意していましたから、丁度良いと言えば良いでしょう。

「エヴァが気に入ってくれると良いですが・・・」

「大丈夫ですよ、リディア様。親しい方よりの贈り物は、何より嬉しいものですから」

はしゃぎ回る家族を見ながら、シヴァさんが用意した綺麗な箱に、私達からエヴァへのプレゼントを収めます。

緑のエメラルドの周りに、赤いルビーと青のサファイアを配した指輪を。

## 第02話「御伽噺の魔女リティア」（後書き）

エヴァちゃんが家族になる話です。

作中でサラッとキンクリしたのは仕様です。

この辺りの話は閑話を入れたいと計画中。

終了時のモヤモヤした感じを、どうにかする為に続きを捲りそな  
気がしてきましたw

## 閑話「吸血鬼エヴァンジエリン」（前書き）

今回は完全にエヴァンジエリン視点。  
本編と合流するまでの話？でしょうか。  
短いですが、書けたので投稿です。

## 閑話「吸血鬼エヴァンジエリン」

私は吸血鬼、エヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。

人々から忌み嫌われ、命を狙われる怪物だ。

私が人間でなくなつたのは、10歳の誕生日の事だった。地方貴族の一人娘として、何不自由のなく暮らしていた。

しかし、その日・・・

目を覚ました私は、すべてを失つていた。

逞しく暖かな父の腕を。

美しく優しい母の胸を。

柔らかく厳しい乳母の顔を。

頼もしく真面目な家臣たちの声を。

そして、人間としての自分を・・・

私は犯人を捜し出し殺した。

罪を償わせたとは言わない。

ただ、自分の中の怒りと憎しみを叩きつけただけだ。

誤算だったのは、私が考えていたよりも、人は排他的な生き物だったことか。

吸血鬼となつた私は齡をとらない。

10歳の子供が、2~3年経つても全く成長しなければ、気味悪がられる。

周りが警戒していれば、私の異常を見逃してはくれない。

「痛つ！」

「まあ、大丈夫？ エヴァちゃん」

「うん、このくらいなら直ぐ治るから・・・」

傷が治るのが早すぎる。

切つ掛けなんて、そんなものだつた。

気が付けば私は、何度も人里を追われた。

村人に、衛士に、騎士に、神父に。

様々な人に命を狙われた。

今まで信じていた教会の神父様が、私の様な幼子を犯そうと迫つて  
きたのが最高に滑稽だつた。

あんな下劣な輩に慰み者にされ、果てには火あぶりなんて御免だ。

私は・・・仇討ち以外で初めて人を殺した。

私は神を信じることを止めた。

いや、違うか・・・

信じられなくなつただけだ。

「見つけたぞ！ 吸血鬼つ！ 世を乱す悪の権化めつ！」

私の命を狙う者に「魔法使い」が加わつた。

奴らは不思議な呪文を唱え、炎や氷、風や土を操り襲つてきた。

未知の攻撃に為す術もなく倒された。

激しい痛みの中、とどめを刺そうと近づいてくるモノが見えた。

私は・・・抗いがたい内なる声に従い・・・ソイツの首筋に噛み付  
いた。

「正義の魔法使い？ 私がこうなつたのは、お前たち魔法使いのせい

ではないかっ！お前たちは小娘ひとり助けられず、逆に命を奪おうとしているではないか！？…………世を乱す悪の権化？それはお前たち人間の事だろ？み・・・

吸血した際、魔法使いに関する知識が頭に流れ込んできた。今まで、こんな事は起こらなかつたので戸惑つたが、コレも吸血鬼の力の一つだつたのだろう。

同じような事を何度も繰り返し、私は魔法の知識を身に着けていった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を、こおる大地！」

昨日は、私の首を狙つてきた8人の傭兵を退けた。  
今日は、私の命を狙つてきた3人の魔法使いを返り討ちにした。  
明日は・・・、何事もなく過ごせるだろうか？

気が付くと、お父様、お母様よりもずっと私は年上になつていた。あんな事がなければ、天寿を全うした両親との別れを経験したであろう。

それほど月日が流れていった。  
考えないようにしてきたが・・・、私はずっと変わらずに生き続けなければならないのだろうか？  
この安らぎの無い生は、いつまで続くのだろう？

私の足は、生まれ故郷へと向いた。

50年の歳月は、私の知っている景色を飲み込んでいた。

生まれ過ごした城は無く、知らない村や町が在る。

何もなかつた草原には道が出来、道が在つた場所は荒れ地と化していた。

驚いた事に、城の近くを流れていた川が消えていた。  
20年程前に川が氾濫し、押し流された土砂により、流れが完全に  
変わつてしまつたらしい。

自然ですら、私の記憶にある姿を失つてゐるのだ。

「いいかい、不用意に魔女様の森に近付いてはいけないよ。でも、  
本当に最後の最後、どうにもならない時は森に行つてござらん。運良  
く魔女様に会えれば、お力を貸してくれるはずだよ」

「えへ、でも魔女つて悪魔と契約した悪いヤツなんでしょう？」

「そりだよ～、おばあちゃん。悪い魔女は赤ちゃんを攫つて食べち  
やうんでしょ？」

そんな話を聞いたのは、たまたま立ち寄つた村の広場だつた。  
小さな村や町には必ずいる知患者の老婆が、子供たちに囮まれなが  
ら御伽噺を聞かせていくようだ。

老婆の語る物語と子供たちの反応に、ただの子供だった頃の記憶が  
重なる。

あれは、お母様が眠る前に聞かせてくれた御伽噺。

「「とんでもない、森の魔女様は善き魔女なんだよ。これまで沢  
山の人や村が助けられているんだよ。だから、この辺りに住む人た  
ちは善き魔女の森と呼び、魔女様の暮らしを乱さない様に、不用意

に近づいて迷惑をかけない様にしているんだよ」「

故郷の大地を踏んでから初めて・・・私の記憶と変わらないモノを見つけた。

視界の片隅に映る老婆の語る言葉と、思い出の中のお母様の言葉は完全に重なった。

魔女は、変わらずにいるのか？

私は魔女の存在を確かめるため、記憶を頼りに魔女の森を目指した。

「いい、キティ。不用意に魔女様の森に近付いてはいけませんよ。でも、本当に最後の最後、どうにもならない時は森に行つてござらんなさい。運良く魔女様に会えれば、お力を貸してくれるはずよ」

お母様・・・善き魔女の森に、魔女様は居ました。



## 閑話「吸血鬼エヴァンジエリン」（後書き）

視点を変えた事を意識し過ぎて、本編と全然違う文章になってしまつた気が・・・。

次回は本編の続きを予定しています。  
拙い文に付き合って頂き感謝です。

ではでは。

## 第〇三話「異端の魔女リティア」（前書き）

1か月空いてしまった・・・。

いや、本当は半月位で投稿出来そうだったんですが、途中で気に入らなくて全部書き直したんですよ。

で、また同じ時間掛けて書いてしまったワケですw

今回、時代は地味に進んでいますが、話は進んでいません。

それでは、どうぞ。

## 第03話「異端の魔女リティア」

皆さん、こんにちわ。異端の魔女リティアです。

気が付くと魔法使い達から「異端の魔女」なる二つの名で呼ばれるようになつていきました。

教会にしろ、魔法使いにしろ、自分たちと違う者に対して、少々過敏過ぎる気がします。

先日も、教会の異端審問官と名乗る方が森に侵入してきましたが、審問どころか一方的に襲い掛かつてきましたし……。

「で、貴方たちは何の御用で……？」

「黙れ！魔女めっ！！貴様が邪悪な異端の魔法を使う事はわかつている！無駄な抵抗は止めて投降するが良いつ！」

私の目の前で喚き散らしている「魔法使い」の方は、何が言いたいのでしょうか？

確かに私は魔女ですが、開口一番に「黙れ」って、明らかに此方の言葉を聞く気が無いのではないでしょつか？

というか、邪悪？

私の魔法って邪悪な魔法だったのですか？初めて知りましたよ？

「……で、あるからして！崇高な使命を帯びた我々は……！」

口上はまだまだ続いているが、後ろに控えている部下の方達は何故心酔したように聞き入っているのでしょうか？どう考へてもツッコミ待ちだと思うのですが……。

「さあ、覚悟は良いか！？」

「あの、投降がどうのって言つてませんでしたつけ？」

「ふん、見苦しいぞ、魔女っ！正義の鉄槌を受けるが良いつー！」

もうメチャクチャです。

何か危ない宗教でも信仰しているとしか思えません「魔法使い」。正直な話、教会の方達より理解に苦しむ方達です。

私利私欲無しに、この理不尽さ。

エヴァから話に聞いていた時は、誇張されているのだらうと苦笑していましたが、現実の彼らは聞いていた以上に理不尽です。

「まあ、もう慣れちゃいましたけど・・・」

私が呟いた瞬間、木々の隙間から見える空が急に暗くなり、森の中が暗さを増しました。

一瞬遅れて強大な魔力が周辺に溢れ、目の前の方達はギョッとしたのか動きを止めました。

すると木々の間から沢山の蝙蝠が溢れだし、私の横に集まり出しました。

「姉様、今まで時間を掛けているのだ？そろそろ予定の時間だぞ

どうやら時間を掛け過ぎてしまったようです。

風も無いのに黒いマントをなびかせ、長身で妖艶な雰囲気を持つた美女が現れました。

というかエヴァです。

人前に出る時は大抵この姿ですね。

なんでも・・・子供の姿だと悪意ある者には舐められ、善意の者は魔女の使いの子供扱いを受けるのだとか。

100年以上を生き、プライドも高いエヴァには耐え難いようです。ちなみに、スタイルの参考はイフリータさんとシヴァさんらしいで

す。

貴禄たつぶりに腕を組み、鋭い牙を覗かせながら威圧的に口元歪ませ「魔法使い」を睨み付けています。

「ふん、貴様ら、どこの馬の骨かは知らんが、魔女に救いを求めて来た輩では無いな？ そうそうに立ち去るが良い！」

実はエヴァの言い分も中々一方的だと思つてしまつたのは秘密です。まあ、こちらは迷惑ではなく親切からの発言なので良しとします。

う。

「その牙・・・吸血鬼かつ！？ こんな怪物まで使役しているとは…」

「（いえ、使役とかは無いんですけど・・・）」

むしろ、私達が養つている状態ですから・・・使役されてるの方が状況的には合つています。

「20数える内に消え失せるが良いつ一引かぬと言つならば我らの牙が貴様らの身を・・・」

「業火の如く焼き尽くしつ！…」

「魂すら凍て付かせつ！…」

「血の一滴すら飲み干すであらひつ…」

・・・皆さん、私の家族が大変男前です。

周辺の大地を揺るがす程の魔力とプレッシャーに、先程までの勢いは何処へ行つたのか「魔法使い」達は逃げ出してしまいました。

・・・ホントに何をしに来たのでしょうか？

というか、イフリータさんとシヴァさんは何時の間にやつて来たのでしょうか？

そして、何故に三人とも私をチラチラ見ながらモジモジしているの

でしょうか？

「…………え、と、三人とも、ありがとうございます。助かりました（主に相手が）」  
「ふつ、任せておけ、姉様。私が居る限り、森と姉様は安泰だ」  
「リディア様との時間を奪う憎き輩に鉄槌を下したまでです」  
「あんた、最初はお嬢に抜け駆けの気配がどうとか言つて走り出さなかつたつけ？」

「・・・シヴァ、姉さん？」

「さあ、リディア様、今日は新しい擬人召喚に挑戦なさるのでしたね。準備は整っていますので、後は術者であるリディア様が来れば完璧ですね」

（（（此処までの流れを全部無かつた事にしたつ！？））

あまりに完璧な氷の微笑みに、エヴァは何も言えなくなつた模様です。

基本的にエヴァはシヴァさんに氷の術を指導してもらつているので、師弟関係の様なモノもあり逆らえません。

同じ系統の魔法使いとして、格の違ひみたいなモノがあるやうです。

手配書

「異端の魔女（善き魔女）」

我々の魔法とは全く違う魔法行使する魔女。  
貴重な魔法保護のため、出頭を命じるが、これを拒否。  
以降、実力行使で連行を試みるも全て退けられている。

緑の導師服を着た10代後半の女の姿が確認されているが、存在が確認されてから200年近く経つており、見た目通りの年齢では無いと思われる。

吸血鬼を従えている事から、魔女自身が吸血鬼の可能性も考えられる。

強力な従者を持ち、召喚魔法に長けているが、自身も強力な魔法使いであり、捕縛は困難であると判断される。

また、住処としている森がある領地では、人々を助ける善き魔女として古くから伝承で知られており、現地人の協力を得るのも難しい。

#### 「炎の魔女（赤の魔女）」

前述の魔女の従者の一人と思われる、炎の魔法に長けた女。異端の魔女の使いで、炎の魔獣が人の姿を取つているとする伝承もある。

#### 「氷の魔女（青の魔女）」

前述の魔女の従者の一人と思われる、氷の魔法に長けた女。異端の魔女の使いで、氷の精霊が人の姿を取つているとする伝承もある。

#### 「闇の福音（黒の魔女）」

前述の魔女の従者の一人と思われる、真祖の吸血鬼。魔女たちの中で唯一正体が判明している人物。

本名、エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル。

100年程昔に世間を騒がせていた吸血鬼と同一人物。

当時、幾人ものハンターを返り討ちにし、教会や我々の手を掻い潜つてきた強力な個体。

吸血鬼としての能力に加え、我々と同じ魔法も使いこなし、尚且つ優れた技術を持つ。

経緯は不明だが、ある時期から魔女の元に身を寄せるようになった

模樣。

彼女の存在が「魔女」「吸血鬼」の根拠となっている。

こんな手配書が流れている事など気にせず、森の奥深くで生きています。

P ポスト  
S スクリプト

新たな召喚體の擬人化は成功しました

體の公船「ムセイ」です

紫のセクシーなローブは身を包んだ大人の女性です  
胸元や腰元が大きく露出した服は、ちょっと目に毒です。

だって谷間や、おへそ、腰のラインが剥き出しなのですよ？

二三〇  
第三回

え、と、名前は・・・・・『プレシア』ですかね。

雷を操り、セクシーなローブを身に着けた、紫色の大人の女性。もう『プレシア』しかないでしょう？

## 第03話「異端の魔女リティア」（後書き）

魔法使いの方達が本当に何をしに来たのか不明なのは仕様な気がします。

新たな擬人召喚はラムウのプレシアさん。

いや、だつて、まんまじやないですか

ちなみに唐突に降りてきた擬人化なので、活躍に関しては未定です。  
しかし、かなり好きな人なので出番は優遇してあげたいです。

次も時間は掛かりそうですが、またお会いしましょう。

## 第04話 竜騎士リティア（前書き）

お久しぶりです。

今回もストーリーは進まず、駄文を打つてしまつた自覚あります。  
しかもネタありなので、まあ流してやって下さい。

## 第04話 竜騎士リティア

皆さん、こんにちわ。竜騎士リティアです。

魔女といつ一つ名が漫透しているので、多くの人たちとは知らないと思いませんが、私は竜騎士でもあります。

大きいなる者は「能力をあげる」的な事を言っていたのに、実際にはこちらも魔法と同じで資質はあるから鍛錬しなさい状態でしたが。もちろん普段から鍛錬をしているのですが、ひとつ問題があります。

エヴァが「竜騎士」を理解してくれません・・・

「相変わらず姉様の瞬動は素晴らしい精度だな<sup>（クイックʌフ）</sup>」

「・・・・・（ジャンプなのに）・・・・・」

ある日、エヴァが別荘を用意してくれました。

ダイオラマ魔法球と云うアイテムです。

パツと見は凄く出来の良いボトルハウスなのですが、なんとボトルの中に入れるのです。

想像してみて下さい・・・ボトルハウスという物は自分の理想の環境をボトルの中で再現・表現するアイテムです。

エヴァの用意した物の場合、真っ白な砂浜を持つ孤島に白亜の城が建っているのですが・・・

気分は、超・高・級・リゾートです！

「姉様～、楽しんでるか～？」

「ええ、最高です・・・」

現在、私とエヴァはビーチに設置したチェアに寝そべりながら、南国の陽気と、爽やかな潮風に身を任せています。

ちなみに、イフリータさんは涼しい場所に避難したシヴァさんの付き添いで、城の方で食事の準備中です。

正にこの世の楽園といった雰囲気に、かれこれ3日ほど浸っているのですが、なんとボトルハウスの外では3時間しか経っていません。エヴァによると、時を操る魔法と空間を操る魔法を組み合わせて作り出した、一種の結界の様なモノだそうです。

私には分からぬのですが、この世界の魔法技術の結晶との事。更に別荘内の物は魔力で修復可能ということで、私たちは思いました。

これで思う存分に力を振るつて修行が出来ますと。

「そういえば、姉様。私もイフリータやシヴァ姐さんの様な『必殺技』を身に付けようとと思うのだが、何かアイディアは無いか?」「ん~、必殺技?地獄の業火とか、ダイアモンドダストみたいなですか?」

「そう、それだ。出来るだけ派手なモノが良いな!」

エヴァの必殺技ですか・・・

別荘内で周りを気にせず力を使って試合をした一人を見て感化されたのでしょうか?

「氷の広域殲滅魔法があるじゃないですか?」

「いや、あれは魔法であって、必殺技とはちょっと違つた気がするのだ」

「でもエヴァは魔法使いですから、必殺技も魔法になつてしまつるのは無いですか?」

「むう、ならば！もつと派手なオリジナルの魔法を創るぞー！」

こうしてエヴァの必殺技作りが始まつたのですが、意外な切り口によつて僅か2日で必殺技が完成してしまいました。

切つ掛けは話を聞いたイフリータさんの一言。

「必殺技って言つても、アタシ達はただ種族としての力を解放してるだけだしなあ？」

「それだっ！！吸血鬼としての力を最大限に使えば良いっ！」

ここで吸血鬼の種族としての特性を考えてみます。  
エヴァの場合は真祖の吸血鬼、つまりハイハイライトウォーカーのため、本来の弱点が弱点ではなかつたりするのですが、この今回重要なのは優れている部分です。

人間とは比べ物にならない圧倒的な魔力。

強靭な肉体を魔力で更に強化した脅威の身体能力。  
多少の傷など一瞬で完治する再生能力と不死性。  
コウモリとなり分裂したり出来る変身能力。

意外と魔法とは関係の無い能力も高いですね。

本人が完全に魔法使いスタイルなので、あまり出番もありませんし・

「これだっ！イケる、イケるぞっ！！」

「リティアさま、アタシ何か変な事言つたかな？」

エヴァがおかしなテソンションになってしまったので、イフリータさんが少し不安そうに聞いてきました。

「いいえ、むしろエヴァの助けになつたみたいですよ」

「そ、そなんだ。良かった~」

「そういえば、シヴァさんはどんな具合ですか?」

「浜辺に降りてこなければ、もう大丈夫だよ。」

「暑さは天敵なのに無理をして・・・、私達に付き合わなくとも良かったのに・・・」

「いや、アイツは浜辺でハシャグリティアさまを、間近で見たかつただけだと思ひよ」

・・・ちょっと、恥ずかしさで頬が熱くなりました。

30分後、私たちは城の前庭に当たる広場に集まつていきました。

「何が始まるのかしら?」

「さあ?お嬢様が何かするみたいだけれど?」

暑い浜辺を避けて涼しい城部分に留まつっていた、シヴァさんとフレシアさんも合流です。

「さあ!私の必殺技のお披露目を始めるぞ!」

言ひや否や爆発的に魔力を高め始めました。

エヴァのテンションは依然高いままのようですが。

赤黒い魔力が陽炎の様に身体から立ち昇り、十分に力を溜めたのを確かめると、エヴァは標的の「殴られ地蔵君」をキッと睨みました。

「轟然たる、我が魔力の胎動・・・」

何か何処かで聞いた事のあるような台詞が聞こえたよーな・・・

「・・・奥義つ！！」

一声叫び、吸血鬼の膨大な魔力で強化された脚力で、標的へと猛然と飛び掛かります！

そして、魔力を限界まで込められた拳を叩きつけ吹き飛ばすと、その姿は無数のコウモリへと変わり、飛ばされた標的の近くに実体化、体勢の崩れたであろう標的に拳で怒涛のラッショウを叩き込みます。どれだけの力が込められているのか、一度拳を振るう度に魔力で強化されたはずの吸血鬼肉体、エヴァの拳は傷付き赤い血が舞いますが、傷付く速度より早く傷が修復されていきます。

50発近いラッショウの最後に、両手を頭上に組みハンマーの様に地面に撃ち落し、追掛ける様に急降下したエヴァは、それまで全身に纏っていた魔力の全てを右腕に集め、標的ごと地面に打ち付け叫びました！

「ブラツディ・カリス！！」

技名を叫ぶと同時に、赤黒い魔力が吹き出すマグマの様に標的を海の彼方まで吹き飛ばしました。

「これが私の吸血鬼としての特性を最大限生かした必殺技っ！ブラツディ・カリスだつ！」

「 「 「 「 おおおおおおお 」 」 」

その後、必殺技完成祝賀会が開催され、各自の必殺技談義となつたのですが・・・

「やはり、強者には必殺技が必要だな。イフリータの地獄の火炎、シヴァ姫さんのダイアモンドダスト、プレシアの裁きの雷、姉様の・・・・・・？」

「どうしたの、エヴァ？」

「あの、姉様の必殺技って見た事が無いのだが？」

「リティア様は召喚士ですから、私達を呼び出している現在の状態が、既に必殺技の状態と言えます」

「そ、それは必殺技とは違う気が・・・」

実は私にも必殺技はあるのですが、あまりエヴァには見せたくないません。

残念ながら理解されないので・・・

「姉様、是非見せてくれれば、答えたくなる姉の悲しい性がある」

「そこまでいうなら・・・良いんですけど」

それでも可愛い妹に乞われれば、答えたくなる姉の悲しい性です。いいですよー見せてあげますよー！ー

広場の真ん中まで出てきた私は、久しぶりに竜騎士の鎧を身に付け槍を手にしています。

普段は緑の導師服しか着ていませんからね。

「姉様、期待しているわ」

「「「リディア（さま・様）、頑張つて」「」」

「・・・・・行きます！」

他の皆がするよつに力を溜め、一気に解き放ちます！

「天を仰げつ！ハツ！！」

掛け声と共に標的を魔力で縛り空高く蹴り上げ、自らは更に空高く飛び上ります。

遙か雲の上まで飛び上がり、オーラを纏い標的に向かつて空を往く姿は、まるで天驅けるドラゴンの様に見えていはばずです。

「竜の爪牙に総てを懸ける！プライドオブドラグーン！！」

最後に裂帛の気合」と共に、標的を槍で貫きました・・・・・

「・・・いつものジャンプ？と違うのは分かったが、魔女の代名詞とも云える姉様が格闘系の必殺技といつのはどうなんだ？」

やつぱり理解されませんでした。

## 第04話 竜騎士リティア（後書き）

今回のネタはブラムスなエヴァンジエリンでした。  
幻獣の方々は空気回w

次回は大昔の麻帆良に行くかも・・・

## 第05話「流浪の魔女リティア」（前書き）

いつも、お久しぶりです。

今回は中々キングクリムゾンしています。

早く麻帆良に行きた~いw

## 第05話「流浪の魔女リティア」

皆さん、こんにちわ。流浪の魔女リティアです。

現在、安住の地を求めて彷徨う旅人と化しています。

15世紀中頃、世界に向けて旅立ちました。

この頃には元患者さんの村も森の中に作つてもらい森の住人と化していましたが、一旦時間の流れを調節した魔法球の中に入つてもらっています。

何故こんな事になつているかと言いますと、私達に関わつても旨味が無いとようやく教会も学習してくれたのか、一部の過激な方以外は手を出してこなくなつたのですが・・・

魔法使いの方達は、飽きもせずに定期的に討伐部隊を送つてきいました。

調べてみたら彼らは、組織的に派遣されてきたのでは無く、ほぼ自主的に徒党を組んで私達に襲撃を掛けている事が判明しました。どうせ殺されないからと上層部も、新人の訓練感覚で襲撃を黙認していましたと知つて憤慨しました。

その訓練感覚の襲撃に巻き込まれて、大怪我をした人や動物もいるのです。

その場に私がいなければ、手足を無くしたり、最悪命を落とす程の被害を出しているのに訓練感覚っ！？

と、私は順調に人間不信に陥つていき、家族と私を慕う森の住人達と相談した結果、安住の地を求めて旅に出たのです。  
ちなみに故郷ともいえる森を好きにされるのは腹立たしいので、法手続きを経て正式に私の土地とし、管理人として幻獣ヴァルガリマンダを召喚しておきました。

炎と冷気、雷などの自然現象を操る、なかなかハイスペックな幻獣

です。

色々できる代わりに、イフリータさん達に比べると各属性の限界が低いのですが、自然現象を操る姿は相手から見れば天罰のように見えるので、同じ事が続けば襲撃者の士気を下げるのには打って付けでしょう。

新しい定住地が決まり次第、迎えに来るという事で森の事を任せ、魔法使いの本拠地ヨーロッパを離れたのでした。

「あの・・・姉様？ヴァルガリマンダの顔を覆う仮面って・・・」「エヴァ、アレは彼女の信仰に関わる事だから気にしたら失礼ですよ」

「え、いや、ソレは人間としてのプロフィールって、姉様が考えたモノじゃ・・・？」

「お嬢も細かい事を気にするね～、シャーマンの仕事で必要なんだろ？」「

「いや、だから、その設定自体が・・・」

「アマンダは精霊との交信のため、あの仮面を決して外さないそうです。素晴らしい信仰心です」

「アマンダ！？初めて名前を聞いたぞっ、シヴァ姐さん！？」

「・・・はあ、折角わたしと服の趣味が合つ仲間が出来たのに・・・

・・・

「プレシア・・・確かにアマンダ（？）はお前の服を着こなせる逸材だったが、どう考へても妖艶な姿を仮面で台無しにしてるんじゃないかな？」

「ケケケツ、何ガ氣二入ラナインダ、ゴ主人？鳥ノ化物ミタイデ格

好良イ仮面ダツタジヤネハカ？

「あれはガルーダっていう東の方の国に伝わる怪鳥をモチーフにしたマスクらしいですよ」

「オオ、怪鳥力！オレモ同ジヨウナノ欲シイゼー！」

「・・・話が通じない・・・グスン」

「姉様！姉様！ここは幻獣だらけだぞっ！？首が長いのとか、鼻が長いのとか！ドラゴン程の大きさは無いが、とにかく沢山いるぞ！」  
「アレは象。こっちのはキリンって言つ動物ですよ。幻獣じゃなくて普通の動物ですよ」

「おお！そなのか！？」 むつー「アレは知ってるぞー・ライオンだな！？本物は初めて見たぞっ！」

「お嬢、ハシャイでるな～」

「おや？リディア様、アレは何という動物でしょうか？とても尾が長く、翼があるのですが・・・鳥ではありませんよね？」  
「・・・・・・・何アレ・・・？」

「とうとうマルコ・ポーロの著に記されていた東の果て、ジバン<sup>ジバン</sup>グ

まで来てしまつた・・・

「エヴァー？誰に向かつて話しかけているのですか？」

「いや、気にしないでくれ、姉様。<sup>ちゅうじょ</sup>しかし、黄金の国と聞いていたのに、全然普通の街並みだな。<sup>ちゅうう</sup>明と大して変わらない気が？」

「確かにお嬢様の仰る通りですね。漁村などが何処でも似通つてるのは解りますが、この都の作りは大陸で散々見てきた気がします」「ていうか、何だか國中が殺伐としてないかい？戦争でもしてるのかね？」

「・・・（あ、戦国時代ですか）・・・」

江戸幕府が出来ました。

私たちは教会も魔法使いも居ない上に、新政権樹立でゴタゴタしている所に目を付け、武蔵という地域の山林に新たな村を作りました。流石に異人全開では問題があるので、髪を染めたり違和感を緩和するアミニュレットでも配らないといけないかもしません。

「リディア、ちょっと良いかしら？」

「なんですか、プレシアさん？」

「森の奥の方で、妙な物を見つけたの。何人か連れて来てちょうどいい」

シヴァさんとエヴァに、魔法球から解放した村人たちの事を任せ、自分たちの家を建てるのに良さそうな場所を探していると、周辺の散策に出でていたプレシアさんが戻ってきました。

一体何を見つけてきたのでしょうか？

「わかりました。イフリータさん、良いですか？」

「問題ないよ、リティアさま。シヴァたちは手が離せないだらうしね」

私と一緒に、家（の予定地）探しをしていたイフリータさんの了解も得たので、プレシアさんに案内してもらいましょう。

「うつちよ

「「ほああああ・・・」」

案内された森の奥に着くなり、私とイフリータさんは何とも間抜けな声を上げてしまいました。

直ぐ隣に立っているプレシアさんが、うんうんと頷いているところを見ると、本人も発見時に似たような反応をしたのかもしれません。私たちの目の前に現れた、見上げる事も困難な程に巨大な樹木。これ程の大きさの樹を見るのは初めてです。

「確かに世界で一番背の高い樹木セコイアの平均樹高が80メートル、その中で更に一番高いモノが樹高100メートルちょっとだつたはずよ」

「プレシアさん詳しいですね。この樹・・・此処からでは天辺が見えませんね」

「幹も凄く太いよ？一周したらジョギングコースだよ、きっと」

「薩摩の山奥で見た杉の樹より、遥かに大きいわね」

更にいうなら、何故こんな巨大な樹に、今まで気が付かなかつたの

でしょ？

森に入る前から見えていないとおかしい大きさのはず……  
ああ、ツツコミ所が多過ぎます。

「……ん？ なんだか私たち以外の魔力を感じませんか？」

「そうなのよ、リディア。どうやらこの樹が結構な魔力を内包しているらしいの。しかも、その魔力が作用して、この樹の周りだけ天然の隠匿結界になっているみたい」

「ずいぶんファンタジーなモノを見つけちゃったねえ、プレシア？」  
「随分とファンタジーな物を見つけちゃったわ」

ファンタジーの塊な私たちが言つと、何だか変な感じがしますね。

「とりあえず、どうしましようか？」

「折角だし、ここに家を建てれば良いんじゃない？」

「悪くは無いと思つけど、それだと村の子たちから認識されなくなってしまうわ」

うーん、それは困りますね。

私たちを慕つて、こんな異国にまで付いて来てくれた人達に対して、そんな無責任な扱いは出来ません。

「この樹と村の中間にあたりに家を建てましょ。この樹は一応バスを繋げておく位で良いでしょう。プレシアさん、お願いします」  
「わかったわ」

私の言葉に応えてプレシアさんが樹に対し、私たちを認識させる魔法を発動させます。

主に、私と樹の間で軽い放電現象が起きているんですが、これは魔法的な処理なのか、電気的な処理なのか……謎です。

「はい、終りよ」

「ありがとうございます」

「それじゃ、改めて家の場所探しと行きますか」

今日は家族で話す事が多そうです。

## 第05話「流浪の魔女リティア」（後書き）

次回には麻帆良が出来そうな感じです。

今回の中身1、新幻獣：アマンダさんですが・・・

「ヴァルガリマンダ」 or 「ヴァリガルマンダ」

皆さんはどうなりで認識していますか？

ネットで調べると、一応ヴァリガルが正式ツポイのですが（もしかして検索も出ます）、Final Fantasy Wikiにはヴァルガリで乗つっていて「ヴァリガルマンダの事」等と載つているのですよ、コレ。

ちなみに、Gooogle先生で検索するとヴァルガリの方が、ヴァリガルの25584倍ヒットします。

今回の中身2、現在世界最「高」115.5mの樹はハイペリオンという大変強そうな名前が付けられているそうです。

今回の中身3、薩摩の杉とは縄文杉の事です。

日本最大の樹木、かは知りませんが日本一有名なデッカイ樹で、幹周16mに及ぶとか。

それを考えると、麻帆良の世界樹がいかに非常識なモノか、分かる気になります。

今回の中身4、「隠匿結界」という言葉の違和感。

「隠蔽」の方が馴染むのですが、物体を隠す時は「隠匿」、物事を隠す時が「隠蔽」なので、隠匿結界としました。

素直に「認識阻害」とすれば良かつたかと、今さら・・・

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
次回は、一ヶ月以内を目指したい・・・

## 閑話「三つの天災アマンダ」（前書き）

はい、どうも。

今日は閑話です。

お留守番の彼女を、麻帆良に呼ぶ為の話とも言いますが。

短いですが、お立ち会い下さい。

## 闇話「三つの天災アマンダ」

皆、息災かの？

妾の名は、三つの天災アマンダ。

自然現象を操る力を持つ怪鳥、ヴァルガリマンダの化身じや。

世間では、魔女が去つた際に森の管理を任せられたシャーマンと認識されておる。

口元以外を覆い隠す怪鳥の仮面を決して外さない事が、精霊との交信だ何だと、妾のシャーマンとして存在感を確たるものにしている様じや。

ついでに金色の導師服を纏つてるので、魔法使い共には魔女の一人として付け狙われておる。

まあ、その通りじやが。

さて、マスター・リディアから、この森の管理を任されて早40年。定期報告を兼ねて頻繁に、極東まで会いに行つてはいるのじやが・・

・

「何故！？妾だけが一人で留守番状態なのじやつ！？」

現在、森の中には妾と獣達しかおらんので、退屈極まりないのじや・

・

（偶に襲い掛かってくる魔法使い共は、鬱陶しいだけじや）

獣達の言葉が理解出来るので、話し相手が全く居らぬ訳ではないのじやが、マスター・リディアによつて擬人召喚され、人間と同じ様な生活サイクルの妾と、夜行性の者が多い奴らとでは、微妙に嗜み合わんのじや。

お互に眠い時に話掛ける事が多くなるのでな。

問題が発生した時以外は、お互にお互いを枕にして眠っているのが常じやし、独り言が多くなつて困るの。

といづか、妾は最近雨乞いしかしていらない気がするの。

「そういえば・・・」

先日、マスター・リディアの元を訪ねた時は、村の子供たちとHド？とやらに祭り見物に行く約束をしておったのじゃ。  
祭りとは羨ましいの。

妾も一緒に行きたいのじゃ・・・

しかし、この森の管理をあまりサボる訳にも行かんし。  
何か口実でもあれば良いのじゃが。

「先日は、教会から白魔法使いとして認定された報告じやつたから、  
ちょっとやそっとの事では、この短い間隔で会いに行く口実には出  
来ん・・・・・・」

そつそつ、マスター・リディアが白魔法使いとして教会に認められたのじゃよ。

今の法王は、この地域に所縁のある人物らしく、マスター・リディアが邪悪な魔女などでは無く、長きに亘つて人助けをしている「良  
い魔法使い」だと認めさせたんだそうじや。

おかげで、名実共に「善き魔女」として認定され指名手配を解除さ  
れた上に、詫び状まで届く騒ぎになつたのじゃ。

更に詫び状の最後に、今後はマスター・リディアの列福・列聖を検討しているとの一言があり、さすがに度肝を抜かれたモノじや。どうやら不可思議なモノを魔女や悪魔の仕業と貶めるのでは無く、神の奇跡・神の試練とするのが、現在の教会側の方針らしい。  
その為、マスター・リディアの様な存在は、むしろ求心力として積  
極的に取り入れたいのかもしれん。

「まあ、白魔法使い認定を受け、懸賞金を解除された事で、教会にも賞金稼ぎにも狙われなくなつたという事実が重要じゃな」

教会の一部と繋がつてゐる「魔法使い」共は、教会勢力との関係悪化を恐れ、指名手配を解除する事になるじゃろつ。妾達を邪惡な魔法使いと襲つてくる奴らの大半が、ヨーロッパ圏では魔女扱いを恐れてコソコソしているというのに、妾達は聖人候補として堂々と活動出来るのじやから、笑いが止まらぬ。

「立派な魔法使い共め、ざまあみろじやー！」

森の中に妾の笑い声が、しばしの間響き渡つた。

「（）んなビッグニュースの後では、報告する事など無いではないかあ～～～！～！」

我に返つたのじや。

どうにも現状では、妾がマスター・リティア達と共に、祭りに参加するのは不可能じや・・・

「はあ・・・、見回りに行くかの」

見回りを始めて間も無く、妾は不思議なモノを見つけたのじゃ。

「・・・行き倒れかの？」

仮面から露出している口元、といつか顎に手をやり首を傾げ、考えるポーズを取る。

じうでも良いかも知れぬが、実はこのポーズはマスター・リディアの真似なのじゃ。

可愛らしい主に<sup>あやか</sup>おひつとしているのじゃが、何故かエヴァからは微妙な表情を向けられてしまった。

何が問題だったのじゃうつか？

・・・・・

まあ、良い。  
この行き倒れを、じうにかするのじゃ。

ボロボロの服を纏つた少女の様じゃな。幸いと云つて良いのか、賊の類に襲われた訳では無く、何日も森の中を彷徨つた結果、転んだり引っ掛けたりして、服も肌もボロボロになってしまった感じじゃ。

「これ、娘。意識はあるか？」

「・・・ん・・・あ・・・・」

ふむ、薄汚れてしまつているが、中々整つた顔立ちじゃな。

ブレシアの好きそうな美少女じゃ。

とにかく家に連れて行くかの。田立つた怪我は無によつじやが、先

ずは怪我の確認を兼ねて風呂、そして飯じゃな。

「…………」

田を覚ました様じやな。

「…………」

「…………私は、…………」

「」

それだけ口にすると、娘は意識を失ってしまったのじや。

妾の顔を見て、一瞬目を見開いた気がしたが、仮面を驚かれるのは慣れておるので気にはせん。本当じや。

ファーストネームは聞き取れなかつたが、ブランフォードか。何處ぞで魔女の森の噂を聞いて来たのか、唯の迷い人か。どちらにせよ、する事が出来たのは僥倖じや。

全力で助けてやるといつつかの。

大きな怪我などは無かつたが、想像以上に疲労が溜まつていた様じや、意識が朦朧としている様なので、果実を搾つた物を口移しで飲ませて寝かし付けてやつたのじや。

流石に汚れたままというのは気になるので、浄化魔法で身を清めた後でじやがな。

綺麗にしてみると、やはりプレシア好みの美しい少女じやった。

これならプレシアから貰つた妾の服を手直しすれば、「バツチリ」

着こなせるはずじゃ。

「ん？ 待つのじや・・・ この娘の望み次第では、マスター・リティアの元に行けるのではないかの？」

フフフッ、娘よ。早く田覚めるが良いのじや。

# 手配書

手配書

異端の魔女／善き魔女／白魔法使い

本名：リティア・ミスト

ヨーロッパで現存する中では最古の魔女集団「サバト」の盟主。教会から白魔法使いの認定を受けたため（これに伴い名前が判明）、教会勢力へ配慮し旧世界の魔法使い組織は懸賞金を解除。更にこれまでの活動の見直しにより、「立派な魔法使い」への声もある。しかし、本国では引き続き手配を続行する。

現在は住処の森を離れ放浪中のため  
この300年間で初めて所  
在が不明となつてゐる。

目撃情報求む。（情報提供にも褒賞あり）

「三つの天災／仮面の魔女」

上記魔女が放浪後、魔女の森を守つてゐる魔女。

確認は取れていなが上記魔女の従者の一人と思われる。

常に鳥を模した禍々しい仮面に顔を隠しているのが特徴。

他の魔女達と同じく、色違いで同形の導師服を纏っているが、戦闘方法はかなり異なり、まるで自然操る様な現象を起こすのが確認されている。

魔法でそうみせているのか、本当に自然操っているのかは確かめられない。

近隣では日照りの際に雨乞いを請け負つたりと、シャーマン的な活動が目立つ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

## 闇話「三つの天災アマンダ」（後書き）

といつわけで、アマンダさんを呼ぶ準備完了です。

最終的には森をどうにかしないと麻帆良に永住出来ませんがw

今回の中身1、魔女の森に積極的に手を出して来ていたのは魔法世界の影響が強い魔法使いという事です。現地魔法使い涙目です。

今回の中身2、列福・列聖について。

とても簡単に説明すると「とある～」の聖人とかに認定される事です。

今回の中身3、主人公たちの集団に名前が付きました。

「サバト」まんまですね、魔女集団ですからw

今回の中身4、リティアのファミリー名は妄想w  
召喚士の隠れ里ミストの村から。

それでは、今回はこの辺で失礼します。

続きは半月位でイケるかもしません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8033o/>

召喚生徒リディア

2011年9月3日06時34分発行